

人々のつながりで里山がよみがえる

里山は、長い間、稲作や炭焼き、落ち葉による堆肥作りなど、人々が自然の恵みを利用するために、絶えず手を入れることで維持されてきました。しかし、薪から石油へ、堆肥から化学肥料へと人々の暮らしが変化していく中で、多くの里山が荒廃してしまいました。

里山は、人々の暮らしとともに息づいてきた自然環境です。そのため、里山を守り育てていくためには、そこで生活する人々の暮ら

しを無視することはできません。この点が、屋久島や白神山地といった原生林を守ることと大きく異なり、里山の保全を難しいものになっています。

しかし、人々の自然への関心が高まりつつある昨今では、次世代に豊かな自然を残していきたいと考え、行動する人々が増えてきました。各地で様々な保全活動が起こり、再生した里山も少なくありません。

荒廃した里山を都市と農山村の共同で保全

山村塾(福岡県黒木町)

棚田や茶畑が美しい中山間地の黒木町では、高齢化や担い手不足により、農地や山林の荒廃が進んでいる。

「山村塾」の椿原代表は、郷里で農業を継ごうとUターン。変わり果てた景観に心を痛め、昔の美しい棚田を取り戻そうと、1994年に仲間とともに「山村塾」を設立した。また、取り組みを更に発展させるため、周囲の心配を他所に、借金をして農林業体験交流施設「四季菜館」を建設した。

里山の大切な機能を発揮させるためには、人の手入れが不可欠であり、農地を手放さない、荒廃させないためには農家が経済的に自立していく必要がある。

山村塾では、農林業体験を通じ、都市住民に農山村の自然や里山保全の必要性や魅力を伝えることで、農林作業を手伝うボランティア



棚田で田植え



棚田の石垣修復

が増え、里山で育った農産物を買って支える輪が広がるなど、農山村の応援団を増やす取り組みに育ってきた。

都市と農山村が手を組み、農林業を通してともに自然環境を守っていく。里山に活気を呼び戻す山村塾の取り組みは、今や地域になくしてはならない存在となっている。



炭焼き

都市住民の憩いの森を保全

こうのす里山くらぶ(福岡市南区)

同団体の活動場所は、福岡市中央区と南区の境にある鴻巣山特別緑地保全地区。

会員は年齢も性別も住所も様々で、地元住民は半数程度。ある程度経験が必要とされる高木の間伐から伐採木の解体、さらに秋の恵みであるマテバシイのどんぐり拾いなど幅広い活動を月1回のペースで続けている。老若男女誰もが自分にできる範囲で作業に関わるところがいいところと志賀代表。作業しながらの世間話や、冬場のあったかい鍋を囲んでの昼休憩など、仲間づくりの場としても大切な活動となっている。

志賀代表によれば、社会貢献意識や使命

感というよりは「楽しみ」が活動の主な目的になっているという。気分転換のため、健康づくりのため、学びのため、子育てのため。会員それぞれが自分なりの楽しみややりがいのために活動に参加している。もちろん活動が「楽しく」あるために、安全管理に最も重きを置かなければならないのはいうまでもない。

うっそうとした常緑広葉樹の暗い森が、手入れされることによって光が差し込む散策しやすい憩いの空間になる。楽しみながらゆっくりと、だが着実に、季節感あふれる豊かな森づくりが進められている。



「なんもないムラ」の見つめなおしが日本一元気な村を生み出した

地域運営学校(任意団体) 角川里の自然環境学校(山形県戸沢村角川地区)

山形県の山深い農村「戸沢村角川地区」。ある時までは、深刻な過疎や高齢化に悩む、ごくありふれた農村だった。しかし、今では人口の数倍の人が1年間で訪れる。

農林業以外目立った産業もなく「なんもないムラ」と住民も卑下していた村を、1人の大学院生が実践した「地元学」と呼ばれる地域おこしが大きく変えたのである。

地元ではほとんど省みられることのなかった場所が、貴重な動植物の生息地として新たに注目される。村民は「家の裏山が?」と驚きの声を上げ、目を輝かせて案内役を買って出る。



また、お年寄りが生き生きと地域の伝承を語り、女性会では講習会を開いて郷土や伝統料理を披露する。最初は「本当におらだでできるのか」と心配していた地元の人たちも、次第にふるさとに対する誇りを感じるようになり、そうした自然や生活の技を地区内の子どもたちにはもとより、全国から訪れる子どもたちにも伝える活動に取り組むようになってきた。今やその動きは大きなうねりとなり、地域全体に自信がみなぎっている。

いま、かつて里の自然環境学校で遊び学んだ地元の若者たちの中から、角川に留まり暮らしていこうと決意する人もでてきている。進学や就職のため若者のほとんどがでて行ってしまう中、地区にとっては画期的な出来事だ。地区に留まろうとする若者が、本当にここで生計を立てていくことができるのか、角川地区の挑戦は今も続いている。



荒れるにまかせた田畑や雑木林… 里山の土地所有者も、出来ることならば先祖から受け継いだ土地を美しく守っていきたい…そう望んでいるはずだ。

これからの里山を守っていくには、地元では当たり前すぎて気づかれなかった魅力(動植物の宝庫、人々の心の安らぎ、子どもたちの遊びの体験場など)を掘り起こし、より多くの人々の関心を高めていくことが大切です。里

山をそれに関わる多くの人々の共有財産として位置づけ、地元住民や都市住民、学校など多様な主体でボランティアなどのネットワークをつくり、多くの人で守り利用していくことが求められています。

このような里山保全の動きは雑木林や田畑の維持管理だけでなく、地域の活性化や村おこしにつながる可能性も秘めている新しい取り組みとして注目を集めています。

